

古代教会における「病者の塗油」

西 脇 純

はじめに

第二バチカン公会議後の典礼刷新により、それまで「終油の秘跡 *extrema unctio*」と呼び習わされた秘跡は「病者の塗油 *unctio infirmorum*」に改められた(『典礼憲章』73)。苦しみのさなかにある病者が、より自覚的に主に助けを祈り求めることのできる秘跡になったといえる。同時に、病者のため、病者とともに祈る信仰共同体(小教区)の役割も一層強調されることとなった(『カトリック儀式書 病者の塗油』緒言 33)¹⁾。こうした典礼刷新の流れは、治療(cure)と看護(care)との統合による全人的な医療の必要性を強調する昨今の医療倫理学の方向とも一致する²⁾。「病者の塗油」の現代的意味を問うことはますます重要になってきているといえよう。

本稿は、そのような問題意識に基づいて、今一度古代教会における「病者の塗油」の実践を振り返ろうとする試みである。まずその聖書的な背景

1) Cf. *Rituale Romanum ex decreto Sacrosancti Oecumenici Concilii Vaticani II intauratum auctoritate Pauli PP. VI promulgatum, Ordo Unctionis infirmorum eorumque pastolis curae. Editio typica, Vaticano 1975, 20: Unde omnes baptizatos hoc ministerium mutuae caritatis in Corpore Christi participare maxime convenit, tam in luca contra morbum et dilectione erga infirmos, quam in celebratione sacramentorum pro infirmis. Haec enim sacramenta, sicut et cetera, indolem communitariam prae se ferunt, quae in celebratione, quantum fieri potest, manifestetur oportet.* 日本語版儀式書は典礼司教委員会編『カトリック儀式書 病者の塗油』(カトリック中央協議会, 1980年)を参照。

2) 浜口吉隆『キリスト教からみた生命と死の医療倫理』(東信堂, 2001年)の特に127~143頁を参照。

を確認したうえで(1.)、古代の教会規定集や典礼書にみられる病者の油の祝別の祈り(2.)ならびに教父たちの伝統(3.)を考察の手がかりとした。それらの通覧ののち、古代教会の「病者の塗油」の実践から何を学ぶことができるのかを若干指摘して結びとしよう(4.)³⁾。

1. 『ヤコブの手紙』

病者の塗油についての最古の言及は司牧書簡『ヤコブの手紙』に見られる。手紙の著者は冒頭の挨拶で自らを「神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ」(1:1)と紹介する。「ヤコブ」は「主の兄弟ヤコブ」を指すと考えられるが、このヤコブが著者であったかは議論の分かれるところである⁴⁾。F. Mußnerによれば、この書簡は60年以降70年までにエルサレムで書かれた。「ゼベダイの子ヤコブ」の処刑後エルサレム教会の指導的地位にあった「主の兄弟ヤコブ」が著者とも考えられる⁵⁾。いずれにせよ、この時期にエルサレムから離散し、シリアおよびシリアと隣接する北部から北西部にかけての地域に移り住んだユダヤ・キリスト教徒に宛てて書かれたものと推察される⁶⁾。病者の塗油についての言及は5:14-15に出る。

3) 本稿全体の構想は A. Chavasse, *Étude sur l'onction des infirmes dans l'Église latine, du III^e au XI^e siècle. Tome I. Du III^e siècle à la Réforme carolingienne*, Lyon 1942, 28-137; *La maladie et la mort du chrétien dans la liturgie. Conférences Saint-Serge. XXI^e Semaine d'études liturgiques*, Paris, 1^{er}-4 juillet 1974 (BELS 1), Roma 1975 (特に 193-228, 361-379.); K. Richter, "Ist einer von euch krank...". Krankensalbungen in der frühen Kirche, in: *BiKi* 43 (1988) 13-16; D. Borobio, *Annäherung an die Heilungssalbung in der Alten Kirche*, in: *Conc(D)* 27 (1991), 116-124; R. Kaczynski, *Feier der Krankensalbung*, in: *Sakramentliche Feiern I/2 (GDK 7,2)*, Regensburg 1992, 258-273; 宮川俊行「病者塗油の秘跡神学」『カトリック神学』10号(1971年)229-270頁などを参照。なお本文中のシリア語、ギリシア語およびコプト語文献の邦訳作成にあたり、南山大学助教授 W. Dunphy 先生に翻訳・原文照合の労をお取りいただいた。

4) Cf. W. G. Kümmel, *Einleitung in das Neue Testament*, Heidelberg ¹⁷1973, 357-359; R. Hoppe, *Jakobusbrief (SKK.NT 15)*, Stuttgart 1989, 11-14.

5) Cf. F. Mußner, *Der Jakobusbrief (HThK XIII/1)*, Freiburg-Basel-Wien ⁴1981, 1-23, 237-240.

6) Cf. *ibid.* 11-12.

あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいます。

まず注目されるのは、病者のもとに「病気をいやす賜物を持つ者」（1 コリ 12:9.28.30 参照）ではなく、「教会の（単数）」、つまり病者が所属する教会の「長老たち（複数形）」が招かれる点である。著者にとって病者の塗油は、病気をいやす特別のカリスマを持つ者のわざではなく、教会の役職者の奉仕職に属する⁷⁾。

病者のもとに到着すると、彼らは「主の名によってオリーブ油を塗り、祈る」。オリーブ油は古代世界においてはぶどう酒とともに食用のほか薬としても愛用された（ルカ 10:34 では「傷」に「オリーブ油」と「ぶどう酒」とが注がれる）。古代教会は、この病者へのオリーブ油の塗油ならびに「長老たち」による病者訪問と祈りとをユダヤ教の習慣から受け継いだらしい⁸⁾。

ただし「主の名によって」オリーブ油を塗る点がユダヤ教とは異なる。「主」とは、ヤコブ 5:7 以下が主イエス・キリストの再臨について述べることから明らかなように、イエス・キリストを指す。新約聖書の確信によれば、「主の名によって」祈ったり命じたりするとき、そこにイエスの力、ひいてはイエス自身が現存する（使 3:6.16; 4:17 参照）。ヤコブ 5:15 が「信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます」と述べる箇所も、同じ確信の表明とみてよい⁹⁾。

原始教会は、病者の塗油の奉仕をイエスの委託によるものと理解してい

7) Cf. *ibid.* 219.

8) Cf. *ibid.* 219-221. 224 (N.B. 5); J. Gnllka, *Theologie des Neuen Testaments* (HThK.S 5), Freiburg-Basel-Wien 1994, 452 (病者のための祈りと塗油の習慣を示唆するユダヤ教文献に言及する)。

9) Cf. Mußner, *op. cit.* (注 5) 220-221.

た（マコ 6:7-13 参照）。使徒たちは、神の国の到来の福音を告げるにあたり、その目にみえるしるしとしてイエスの為したように「接手」によって病気がいやされることを願った（マコ 16:18, 使 4:30; 9:12; 28:8）。「塗油」はイエスに直接指示されたものではなかったが、使徒たちは自分たちに託されたいやしのおぎのしるしとしてこの習慣をも受け継ぎ、そうすることによっていわば「イエスのおぎを増やしていった」のである¹⁰⁾。

前出引用文中の「(罪を犯した) のであれば」以下は、当時病者への塗油が必ずしも罪のゆるしと同一視されてはいなかったことを物語る。F. Mußner によれば、接続詞「καί」とともに並列された未来形「救われるでしょう」「起き上がらせてくださるでしょう」「ゆるしてくださるでしょう」は、病者の身と心に起こるあるひとつのいやしの現実を描写するための話法といえる。「救う」は『ヤコブの手紙』においては常に救済史的意味合いを帯びるが(1:21; 2:14; 4:12; 5:20 参照)、ここでは心身のいやしを願う文脈で用いられている¹¹⁾。

2. 油の祝別の祈り

2.1. 『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』

『ヤコブの手紙』以降の古代教会における病者の塗油の様子については、典礼祈願文、とりわけ油の祝別の祈りが有益な手がかりとなる。その最古のものは『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』にみられる（以下『使徒伝承』と略記）。『使徒伝承』は教会内の規律を取めたものである。原本のギリシア語版が失われており、著者について不明な点が多い。3世紀初め

10) Cf. *ibid.* 224.

11) Cf. *ibid.* 221-224. 古代世界において油には跋魔の意味も込められた（マコ 6:13 ほか参照）。病気は悪魔のおぎに起因するものとしばしば考えられたほか、罪が健康を損なわせる要因であるとも考えられた。しかしここでは病気と罪との直接の因果関係には言及されていない。Cf. R. Pesch, *Das Markusevangelium* (HThK II/1), Freiburg-Basel-Wien '1984, 330; H. Vorgrimler, *Buße und Krankensalbung* (HDG IV/3), 216-218.

(210～215年頃)ローマのヒッポリュトス(†235あるいは236年)によってローマで編まれたとの説が一般的であるが¹²⁾、3世紀前半にシリアあるいはアレクサンドリアで成立したとの見方もある¹³⁾。油の祝別の祈りは、司教叙階式について定める諸規定の後半部、叙階式ミサ奉献文の直後に置かれている(『使徒伝承』5章)。

油が奉納されると、[司教は]パンとぶどう酒の奉納と同じように一同じことばではなく、同じような力をもったことばで一感謝をささげ、次のように祈る。

「神よ、あなたがかつて王、祭司、預言者に注がれたこの油を聖別し、これを注がれ、これを受ける人々を聖化してください。そしてこの油を味わう人々が強められ、これを用いる人々に健康がもたらされますように。」¹⁴⁾

ここに登場する油は、「チーズとオリーブ」(『使徒伝承』6章)などとともに信徒らが持ち寄った奉納物である。パンとぶどう酒のうえに祈られた奉献文の結びの栄唱の後、油の上にも「(奉献文と)同じような力をもったことばで」感謝と祈願がささげられる。テキストは、まず「かつて王、祭司、預言者に注がれた油」を想起し、奉納された油を前にこの油に同じ聖化の力を祈り求める。この祈願文では、聖香油(*chrisma*)と病者の油(*oleum infirmorum*)の区別はまだ明確ではない¹⁵⁾。神が、油を受ける人々を聖化し、味わう人々を強め、これを用いる人々に健康を賜うよう祈る。油の使

12) Cf. B. Botte, *La tradition apostolique de saint Hippolyt* (LQF 39), Münster ¹⁹⁸⁹, XI-XIX; W. Geerlings, *Traditio Apostolica. Apostolische Überlieferung* (FC 1), Freiburg-Basel-Wien ¹⁹⁹², 144-149.

13) Cf. M. Metzger (ed.), *Les constitutions apostoliques I* (SC 320), Paris 1985, 17-23; Id., *Histoire de la liturgie. Les grandes étapes*, Paris 1994, 54-56.

14) 土屋吉正『聖ヒッポリュトスの使徒伝承—B. ボットの批判版による初訳』(オリエンツ宗教研究所, ¹⁹⁸⁷年) 18～19頁。

15) 同書, 18, 111頁参照。

い道に依じて、神が油の効能のうちにはたらきたもうことを祈念するのである。祈願文からは、信徒たちが「聖別された」油をめいめい自宅に持ち帰り、そこで食用に、あるいは飲み薬、塗り薬として幅広く用いたことが読み取れる。

2.2. 『主イエス・キリストの遺訓』

『使徒伝承』はラテン語、サヒド語などに翻訳されたほか、後代の教会規律集にも多大な影響を与えた。『使徒伝承』を土台に、これを再編集した教会規律集も多くあらわれた。

『主イエス・キリストの遺訓』はそのような教会規律集の1つである（以下『主の遺訓』と略記）。これは5世紀初頭、おそらくシリアで編まれたもので、全2巻からなる¹⁶⁾。昇天を前にしたイエスが使徒たちに訓示を与えるという内容の黙示から始まり、この黙示の枠組みの中で教会規律がイエスの権威をもって語られる¹⁷⁾。『主の遺訓』には、病者の油の祝別についての以下の規定を見出すことができる。油の祝別の祈りは『使徒伝承』同様、ミサ奉献文の直後に置かれており、必要に応じて奉献文中に挿まれた祈願文であったことをうかがわせる。

病者の治癒のための油を司祭が聖別するときは、油の入った容器が祭壇の前に置かれ、司祭は小声で次のように唱える。

「神なる主よ、あなたは弁護者なる霊、主、救いをもたらす名、ゆらぐことなきお方をわたしたちにお与えになりました。このお方は、愚かな者には隠され、知恵ある者には明らかになります。キリストよ、あなたは私たちを聖化し、あなたのあわれみによってわたしたち、あ

16) Cf. F. X. Funk, *Das Testament unseres Herrn und die verwandten Schriften*, Mainz 1901, 87.

17) Cf. Funk, *ibid.* 9-10; P. F. Bradshaw, *Art. Kirchenordnungen. I. Alte Kirche*, in: TRE 18, Berlin-New York 1989, 669-670.

あなたが知恵をもって選ばれた奉仕者を、知恵ある者としてくださいました。あなたはあなたの霊の力をわたしたちにお与えになったとき、あなたの聖性により罪人なるわたしたちにあなたの霊の知恵をお送りくださいました。あなたこそあらゆる病、あらゆる苦しみをお癒しになるお方、いやしの賜物を、あなたによってこの賜物にふさわしくされた者にお与えになりました。あなたの豊沃の型であるこの油の上に、あなたのいつくしみ深いあわれみのすべてを豊かに注いでください。この油が苦しむ人々を解放し、病気の人々を健康にし、回心してあなたへの信仰に近づく人々を聖化してくださいますように。あなたは世々にわたり力と栄光に満ちておられるからです。」
会衆「アーメン。」¹⁸⁾

ここでは『使徒伝承』とは違い「病気の治癒のための油」であることが注記されている。祝別は司祭によって執り行われる。祝別の祈りの本文は、救いのわざを想起するアナムネーシスと油の祝別を願うエピクレーシスとに分かれ、どちらもキリストに宛てて唱えられる¹⁹⁾。

アナムネーシスは「弁護者なる霊」「あなたの霊」などの表現を用いて聖霊を想起する。聖霊を「主」と呼ぶところに、聖霊の神性を強調したコンスタンティノポリス信条の影響を読み取ることができるかもしれない²⁰⁾。また、「キリストよ」以下では、キリスト者のいやしの奉仕職への選びが、生前、病者および苦しむ人々をいやしたイエスの派遣に基づくものであることが想起される。

一方、エピクレーシスでは、聖霊ではなく「あなた(=キリスト)のいつくしみ深いあわれみ」が油の上に呼び求められる。それによれば、油は

18) I. E. Rahmani (ed.), Testamentum domini nostri Iesu Christi, Mainz 1899, 49. Kaczynski, Krankensalbung, op. cit. (注3) 261をも参照。

19) Cf. Kaczynski, Krankensalbung, ibid.

20) Cf. DH 150.

「あなた（＝キリスト）の豊沃の型」であり、祝別されて病の苦しみをいやす油となる。

祈願文はさらに、「病者の治癒のための油」が「回心してあなたへの信仰に近づく人々」にも用いられると述べるが、これは病者の油が求道者にも塗油されたことを示唆する。求道者は洗礼による罪からの清めにまだ与っておらず、その意味でいわば「心の病」の状態にあると考えられたためであろう。「病者の油」が「求道者の油」をも兼ねた一例として注目される²¹⁾。

2.3. セラピオンの『エウコロギオン』

ツムイスの司教セラピオン（†362年以降）の手になるとされる『エウコロギオン』（「祈禱書」の意）はアレクサンドリア典礼を反映していると思われる。1894年アトス山の図書館で発見された写本に収められていた。『エウコロギオン』は、セラピオン自身にさかのぼり後代の編集を経たとみられる30の祈願文から成る²²⁾。病者の油の祝別の祈りを2つ含む。いずれも『使徒伝承』『主の遺訓』と同様、ミサ奉献文に随時挿まれて唱えられた祈願文であった²³⁾。その第1の祈り（『エウコロギオン』Iと略記）は「奉納された油と水のための祈り」という表題が付けられている。

わたしたちはこれらの被造物をあなたのひとり子イエス・キリストの名を通して祝別いたします。苦しみを受け、十字架につけられ、復活し、造られざる方の右の座に着いておられるかのお方の名前を、この水とこの油の上に呼びかけます。これらの被造物にいやしの力が与えられますように。あらゆる熱、病魔、病気が〔水と油の〕服用および塗油によって退けられ、これらの被造物が、あなたのひとり子イエス・

21) Cf. Kaczynski, Krankensalbung, op. cit. (注3) 261.

22) Cf. R. J. S. Barrett-Lennard, *The Sacramentary of Serapion of Thumuis: A Text for Students, with Introduction, Translation and Commentary*, Nottingham 1993, 5-6. 9.

23) Cf. Barrett-Lennard, *Sacramentary*, ibid. 30. 47.

キリストの名によって用いられることにより、いやしのための薬、完全無欠のための薬となりますように。彼〔イエス・キリスト〕を通して聖霊のうちに栄光と力が世々あなたにありますように。アーメン。²⁴⁾

祈願文全体は、キリストに宛てた『主の遺訓』とは対照的に、父に宛てて祈られる。過ぎ越しの秘義を想起する部分は「苦しみを受け、十字架につけられ、復活し……」と信条の響きを帯びる。この短いアナムネーシスの後にすぐ、油と水の奉納物の上に「イエス・キリストの名」を呼びかける。名を呼ぶことを通して呼ばれた者の臨在を願うエピクレーシスである。「被造物」たる油と水とが「イエス・キリストの名」を通して祝別され、病と悪を打ち払う「薬」になるようにと祈る。

病者の油の祝別の第2の祈り（『エウコロギオン』IIと略記）には「病者の油もしくはパンもしくは水のための祈り」という題が付けられている。

わたしたちは、すべての権能と力をお持ちであるあなた、全人類の救い主、わたしたちの主、救い主イエス・キリストの父であるあなたを呼び求め、あなたのひとり子のいやしの力を天からこの油に送ってくださいますように祈ります。この油が、塗油される人々、あるいはこのあなたの被造物に与る人々にとって、あらゆる病気と患いの特効薬、あらゆる悪霊に対する拮抗薬〔となり〕、すべての汚れた霊を駆逐し、すべての邪悪な霊を追い払い、すべての熱、悪寒、いかなる衰弱をも取り除き、よき恵み、罪のゆるし、いのちと救いの治療薬、魂とからだと精神の全き健康と清浄とに資するものとなりますように。主よ、あらゆる悪辣なはたらき、あらゆる悪霊、待ち伏すあらゆる敵、あらゆる災難、あらゆる災厄、痛み、わずらい、打撃、忌むべきことがら

24) Cf. F. X. Funk, *Didascalia et constitutiones apostolorum*. Vol. II, Paderborn 1905, 178-181. Barrett-Lennard, *Sacramentary*, *ibid.* 30-31; Kaczynski, *Krankensalbung*, *op. cit.* (注3) 262をも参照。

の悪しき影が、あなたの聖なる名を怖れますように。その名とひとり子の名を、今わたしたちは呼び求めます。[悪霊たちが]これらあなたのしもべたちの内と外から遠ざかり、わたしたちのために十字架につけられ復活なさった方、わたしたちの病と弱さを身に負われた方イエス・キリスト（マタ 8:17 参照）、生ける者と死せる者とを裁くために来られる方の名がたたえられますように。彼 [イエス・キリスト] を通して聖霊のうちに栄光と力が今も世々にあなたにあるからです。²⁵⁾

『エウコロギオン』IIもIと同様、父に宛てて祈る。文中に「これらあなたのしもべたち」とあることから、病者を前にしての祈願文、あるいは塗油の直前に唱えられた祈願文だったとも考えられる²⁶⁾。

題は「油もしくはパンもしくは水のための祈り」となっているが、これは当時水や油のほかパンにも薬あるいは魔よけの効果があるとされたからであろう。いずれにせよ、『エウコロギオン』IIは治療法に関する用語を数多く含んでおり、祈願文の作者がこの分野にかなり通曉していたことをうかがわせる²⁷⁾。「あらゆる悪霊に対する拮抗薬」「汚れた霊の駆逐」などの表現は、古代社会において祓魔が身体の治癒のひとつの前提となっていたことを物語っていよう。また祝別された油が「罪のゆるし」のためであることをもはっきりと述べている²⁸⁾。

『エウコロギオン』IIは、「全人類の救い主、わたしたちの主、救い主イエス・キリスト」に言及しその「父」なる神を呼び求め、油のうえに「いやしの力」が「天から」降下することを願う。キリストによる救済のわざ

25) Funk, Didascalia, ibid. 190-193. Barrett-Lennard, Sacramentary, ibid. 47-49; Kaczynski, Krankensalbung, op. cit. (注3) 262 をも参照。

26) Cf. Barrett-Lennard, Sacramentary, ibid. 47.

27) Cf. ibid. D. Forstner/R. Becker, Neues Lexikon christlicher Symbole, Innsbruck-Wien 1991, 81 は、「健康 [を得るための] パン Gesundheitsbrot」を供える古代地中海世界の宗教儀式を紹介している。

28) これについて注 11 をも参照。

を想起するアナムネーシスは、このエピクレーシス冒頭部のほか祈願文の後半部、悪霊を追い払い病気克服の力となる「(イエス・キリストの)名」をたたえる文脈においても出る。『エウコロギオン』I同様、信条の響きを帯びるが、マタ 8:17 を引用してイエスが「わたしたちの病と弱さを身に負われた方」であると述べる。生前のイエスのいやしのわざが、全人類の救いの前^{まえ}徴であったことがこの引用句によって想起されている。この引用句によって病者に対するイエスの根本姿勢が想起されている点も目を引く(マタ 8:14-17 参照)。

2.4. ローマ秘跡書の「Emitte」

東方のみならず西方においても病者の油の祝別が実践されていたことが、『古ゲラジウス秘跡書』および『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』所収の祈願文から知られている。

『古ゲラジウス秘跡書』(『古ゲラジウス』と略記)は、8世紀半ば頃パリ近郊シェル^{シエル}の女子修道院で筆写された1つの写本に収められている。『古ゲラジウス』の大半は、7世紀中頃ローマの一小教区において編集された。したがって、『古ゲラジウス』は当時のローマ教区のミサ典礼を反映しているものとみられる²⁹⁾。

一方『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』(『グレゴリウス・ハドリアヌス』と略記)は、9世紀以降の写本群に収められた秘跡書である。ラテラン・バジリカあるいは集会指定聖堂(statio)における教皇ミサ用として、教皇ホノリウス1世(在位625-638年)の下で編集された祈願集が土台になっているとされる。このミサ用祈願集は、その後も新たな祈願文を取り込みつつ時とともに種々の発展段階を経るが、それらのうち、784~791年の間に教皇ハドリアヌス1世(在位772-795年)がフランク王国王カール

29) Cf. C. Vogel (rev. and transl. by W. G. Story/N. K. Rasmussen with the assistance of J. K. Brooks-Leonard), *Medieval Liturgy: An Introduction to the Sources*, Washington 1986, 64-69.

大帝（在位 768-814 年）の要請に応じ帝に送ったとされる写本が『グレゴリウス・ハドリアヌス』である。残念ながら原本は失われてしまったが、原本を忠実に筆写したいくつかの写本からの校訂版によって、内容をかなり正確に知ることができる。したがって『グレゴリウス・ハドリアヌス』は、8 世紀後半のローマにおける教皇司式のミサ典礼を反映したものということができる³⁰⁾。

このようにそれぞれ成立年代や用途を異にする『古ゲラジウス』と『グレゴリウス・ハドリアヌス』であるが、両者は聖木曜日のミサ奉献文に挿まれる祈願として、病者の油の祝別の祈りをそれぞれ 1 つずつ収める。どちらも同じ語「Emitte お遣わしてください」で始まることから「Emitte」と呼ばれている。

2 つの祈願は、冒頭の文言のみならず全体の内容においてもよく似通っている。そこで両者は、ある古い祈願を共通の源としていると考えられる。A. Chavasse は、両者がともに「聖香油 *chrisma*」の語に「病者の油」の意味をも含ませていることから、その源は「*chrisma*」がより広い意味で使われた時代、すなわち 5 世紀あるいは 4 世紀頃にまで遡ることができると考えた³¹⁾。

以下、『古ゲラジウス』『グレゴリアヌス・ハドリアヌス』の順にテキストを示そう。両祈願（『古ゲラジウス』382、『グレゴリウス・ハドリアヌス』334）は、祈願文の前にそれぞれ典礼注記を置いている（『古ゲラジウス』381、『グレゴリウス・ハドリアヌス』333）。そこで、先行する典礼注記も合わせて示したい。

（『古ゲラジウス』381）油の祝別。会衆に向かい次のような言葉、す

30) Cf. *ibid.* 79-85.

31) Cf. Chavasse, *Étude*, *op. cit.* (注 3) 47. 2 つの祈願文の源については後述。このローマ典礼の伝統は、現行の儀式書『病者の塗油』の「油の祝福」の祈願文にいたるまで受け継がれている。Cf. *Ordo Unctionis infirmorum* (注 1), 33-34 (Nr. 75); 『病者の塗油』(注 1) 34~35 頁参照。

なわち「この油は病者の塗油のために [祝別される]」と述べる。「あなたのしもべ罪びとなるわたしたちのため」の後から「わたしたちの主キリストによって」の前までを次のように祈る。

(『古ゲラジウス』382)「主よ、精神とからだの回復のため緑の木からもたらされるようあなたがよみされたこの油脂に (*in hac pinguidine olei*), 天から弁護者なる聖霊をお遣わしてください。あなたの聖なる祝福が、この油を塗り、味わう人、この油に触れるすべての人にとって、からだと魂と霊のまもりとなり、精神とからだのあらゆる痛み、あらゆる虚弱、あらゆる病気を駆逐しますように。かつてあなたは、あなたの完全な香油 (*chrisma tuum perfectum*) を祭司、王、預言者、殉教者たちに塗油なさいました。[あなたの香油は、]主よ、あなたによって祝別され、わたしたちの内奥深くに留まるものです。わたしたちの主イエス・キリストの名によって。[イエス・キリスト]を通して、主よ、あなたは常にこれらすべてのよいものをおつくりになります。』³²⁾

(『グレゴリウス・ハドリアヌス』333) その日、ミサの終わりに、すなわち「[イエス・キリスト]を通して、主よ、あなたは常にこれらすべてのよいものをおつくりになります」と唱える前に、塗油のための油 (*chrisma*) がつくられる。会衆が持参した [油の入った] 容器がかかげられ、教皇は司祭団とともに [次の祈りによって油を] 祝別する。

(『グレゴリウス・ハドリアヌス』334)「主よ、からだの回復のため緑の木からもたらされるようあなたがよみされたこのオリーブの油脂に (*in hanc pinguedinem oliuae*), 天から弁護者なるあなたの聖霊をお遣わしてください。あなたの聖なる祝福が、この油を塗り、この油に触れるすべての人にとって、精神とからだのまもりとなり、からだのあらゆる痛み、あらゆる虚弱、あらゆる病気を駆逐しますように。かつ

32) L. C. Mohlberg (ed.), *Liber Sacramentorum Romae Aeclesiae Ordinis anni circuli* (RED.F 4), Roma 1960, 61 (Nr. 381-382).

てあなたは、あなたの完全な香油 (chrisma tuum perfectum) を祭司、王、預言者、殉教者たちに塗油なさいました。[あなたの香油は、] 主よ、あなたによって祝別され、わたしたちの内奥深くに留まります。わたしたちの主イエス・キリストの名によって。[イエス・キリスト] を通して、主よ、[あなたは常に] これらすべての [よい] ものを [おつくりになります。]」³³⁾

両者を比較すると、どちらの祈願文も典礼注記においてミサ奉献文をしめくくる栄唱の直前に祈願文が唱えられるよう指示している点がまず目を引く。『グレゴリウス・ハドリアヌス』は、教皇が会衆の持参した油を司祭団とともに祝別する、と指示している。

祈願文自体はどちらも「聖霊の降下」を願うエピクレシスで始まる。聖霊の降下、すなわち父なる神の「聖なる祝福」により、油は「からだと魂と霊の」(『古ゲラジウス』)あるいは「精神とからだの」(『グレゴリウス・ハドリアヌス』)「まもり tutamentum」となり「精神とからだの」(『古ゲラジウス』、『グレゴリウス・ハドリアヌス』では「からだの」) あらゆる病をいやす妙薬となる。他方アナムネシスは、エピクレシスの後に出る。その際、『使徒伝承』同様、「祭司、王、預言者、殉教者たち」への塗油が想起される(『使徒伝承』には「殉教者たち」はない)。

祝別された油の服用法は、『古ゲラジウス』によれば塗油 (ungere), 内服 (gustare), 油に触れること (tangere) である。『グレゴリウス・ハドリアヌス』は塗油と油に触れることのみを挙げている。

先に、『古ゲラジウス』『グレゴリウス・ハドリアヌス』いずれの油の祝別の祈りも1つの源に端を発していると述べたが、どちらの祈願文がより古い形態を保持しているかは議論の分かれるところである。A. Chavasse

33) J. Deshusses, *Le Sacramentaire Grégorien. Ses principales formes d'après les plus anciens manuscrits. I.* (Spicilegium Friburgense 16), Fribourg 1971, 172-173 (Nr. 333-334).

は、文法的な簡潔さから『グレゴリウス・ハドリアヌス』の方が古いと考
える。

一方 E. Lanne は、原型となる祈りの存在を指摘した A. Chavasse を支
持しつつも、『古ゲラジウス』『グレゴリウス・ハドリアヌス』の依存関係
については『古ゲラジウス』所収の祈願文の方が古いとみる。彼によれば、
『古ゲラジウス』の祈りの原型は、エジプトで 10～11 世紀頃編集された、
ある祈願集の中にも見出される³⁴⁾。油の祝別の祈りを概観するにあたり、最
後に E. Lanne の見解をまとめよう。

2.5. エジプト『大祈禱書』

E. Lanne によると、先にみた『古ゲラジウス』所収の祈願文は、上エジ
プト、ソハグ(Sohag)の「白い修道院」³⁵⁾に伝わる『大祈禱書』(Le Grand
Euchologe du Monastère Blanc)に収められた油の祝別の祈りと同じ源
流を辿る。これは 10～11 世紀に成立したと見られる祈禱集である³⁶⁾。ただ
し『大祈禱書』の祈願文は、「病者の油」ではなく「婚姻の油」の祝別の祈
りである。とはいえローマ秘跡書の「Emitte」との関係が指摘されている
以上、この祈願文に注意を向けることは有益と思われる。

さらに、主よ、神よ、全能の支配者よ、わたしたちの主イエス・キリ

34) Cf. E. Lanne, L'onction des martyrs et la bénédiction de l'huile, in: Irén. 31 (1958) 138-155. ここでは 139-148 を参照。

35) エジプトの大修道院長シェヌーテ (†465 年) のおじブゴール (Pgöl) によって設
立された修道院。亡くなったおじの後を引き継いだシェヌーテの時代に黄金期を迎
えた。石灰石でできた外壁の色から「白い修道院」と呼ばれる。そこから 5 km ほ
ど北には、赤レンガの外壁に囲まれた「赤い修道院」もある。Cf. T. Baumeister,
Art. Schenute von Atripe, in: Lexikon der antiken christlichen Literatur hg. v.
S. Döpp u. W. Geerlings, Freiburg-Basel-Wien 1998 (=LACL), 544-545; Id.,
Art. Sohag, in: ³LThK 9 (2000) 687.

36) 『大祈禱集』について詳しくは Le Grand Euchologe du Monastère Blanc. Texte
copte édité avec traduction française par Dom E. Lanne OSB (PO 28/2), Paris
1958, 269-280 [5-16] を参照。

ストの父よ、わたしたちはあなたに祈り、あなたに嘆願いたします。天からあなたの聖なる力をこのオリーブの木の実にあるこの油のうえにお遣わしくくださいますように。これをあなたの祝福によって祝福し、聖化し、天からあなたのいつくしみとあわれみとをこのオリーブの木の実ににお遣わしくくださいますように。これは、かつてあなたが祭司、預言者、王、殉教者たちに塗油なされ、あなたの慈愛によって、油をもって彼らを強めてくださった、その油です。この油が、これを塗油され受けるすべての人々からだと魂と霊の回復をもたらしますように。また、[この油が]祝福と幸いの油、喜びと歓喜の油、誇示と力の油、人に対する恵みと愛によっていやしとゆるしの油となりますように。³⁷⁾

この祈願を『古ゲラジウス』と比較すると、いくつかの共通点に気づく。どちらもエピクレシスで始められていること、両者とも人間を3分構造からなる存在ととらえ、その全人的ないやしなしいしは力の回復を祈っていること、あるいは、アナムネーシス部ではどちらも「祭司、王、預言者、殉教者たち」を想起していること、などである。このため『古ゲラジウス』の油の祝別の祈願文が『大祈禱書』のそれに依拠しているとの E. Lanne の説には説得力がある。

他方、ローマ典礼独自の展開もみられる。ひとつには、『古ゲラジウス』が祝別された油の使用によって「精神とからだのあらゆる痛み、あらゆる虚弱、あらゆる病気が駆逐されること」を願い、油が「病者の油」であることを強調している点があげられよう。これにより「婚姻の油」を祝別する祈りは「病者の油」を祝別するための祈りとなり、機能が変化した。

さらに E. Lanne は『古ゲラジウス』の特徴点を次のように指摘している。まず、『大祈禱書』のエピクレシスが「聖なる力」「いつくしみとあ

37) Le Grand Euchologe, ibid. 392-395.

われみ」を呼び求めるのに対し、『古ゲラジウス』のそれは「聖霊」を呼び求める。『大祈禱書』が「聖霊」の語を削ったとはおよそ考えられない。したがって「聖霊」への言及は、『古ゲラジウス』が『大祈禱書』になかったこの語を付加した、追加的な措置だったといえる³⁸⁾。一方、『大祈禱書』が人間の3分構造を「からだと魂と霊」と簡潔に述べるのに対し、『古ゲラジウス』はこれを「精神とからだ」「からだと魂と霊」と言い直すなど、『古ゲラジウス』では「ぎこちなさ」も露呈しているという³⁹⁾。

さて、『古ゲラジウス』と『大祈禱書』の依存関係はこれにより明らかになったと思われるが、両者がある共通の祈りを原型とする、とも先に述べた。それでは両者の源流はどこに見出されるであろうか。

E. Lanneによれば、それは『使徒伝承』においてである。なぜなら、『古ゲラジウス』『大祈禱書』両者にみられる「祭司、(王、預言者、) 殉教者たち」の表現が『使徒伝承』の「王、祭司、預言者」の表現によく似ているからであり、同様に「これを祝福し、聖化し」の表現においても『使徒伝承』の影響下にあると考えられるためである。『古ゲラジウス』『大祈禱書』両者の文言の綿密な比較検討をもとに、E. Lanneは『使徒伝承』から『グレゴリウス・ハドリアヌス』までの伝承史を以下のように結論づけている。すなわち、はじめに『古ゲラジウス』が、『使徒伝承』の油の祝別の祈りを『大祈禱書』から引き継いだ。これを『グレゴリウス・ハドリアヌス』がさらに継承し、文体を整え、時代に即した祈りに再編集した。もはや一般的ではなくなった病者の油の処方「服用 gustare」を削除したほか、「あなたの聖なる祝福」の部分も祝別と塗油の効果をはっきり述べる文章に変えたのである⁴⁰⁾。いずれにせよ、『大祈禱書』が『使徒伝承』から『古ゲラジウス』への橋渡しをしたといえる。古代教会におけるローマ典礼とアレクサンドリア典礼との密接な関係を示す1つの証左ともなろう⁴¹⁾。

38) Cf. Lanne, L'onction, op. cit. (注34) 146.

39) Cf. ibid. 154.

40) Cf. ibid.

3. 教父の伝統

3.1. アフラハト

さて、教父たちもまた、古代教会において病者の塗油が実践されていたことを示唆してくれる。

まず、4世紀前半のシリアの修道者アフラハト（†345年以降）は、337～344年の間に22からなる『論証』（*demonstrationes*）を著し、345年に補遺を1つ加えるが⁴²⁾、その補遺の中で、「いのちの木」（創2:9.16; 3:1-24; イザ65:8 参照）を「光り輝くオリーブの木」と解釈したうえで次のように述べている。

[……] 光り輝くオリーブの木のうちにいのちの秘跡のしるし（*signum sacramenti vitae*）があり、塗油された人々、祭司、王、預言者たちを完成させる。[光り輝くオリーブの木の油は] 闇を照らし、[その油は] 衰弱した者に塗られ、そのかくされた秘跡を通して回心者（*paenitentes*）を立ち返らせる。⁴³⁾

これによると、塗油されるオリーブ油は、旧約聖書の「いのちの木」からとられた油であり、かつて「祭司、王、預言者たち」に注がれて彼らを聖化し、今もなお衰弱した者を強め、回心者に進むべき道を灯し続けている。「祭司、王、預言者たち」は『使徒伝承』『大祈禱書』『古ゲラジウス』『グレゴリウス・ハドリアヌス』の油の祝別の祈りにもみられる表現であることから、おそらくアフラハトはここで病者の塗油のことを念頭におい

41) Cf. *ibid.* 本稿では触れることができないが、E. Lanne はこのほか、『大祈禱書』とセラピオンの『エウコロギオン』祈願文IIとの関連をも指摘する。Cf. *ibid.* 148-151.

42) Cf. Aphrahat. *Demonstrationes. Unterweisungen. I. II. aus dem Syrischen übers. u. eingel. v. P. Bruns* (FC 5/1, 5/2), Freiburg-Basel-Wien 1991, Bd. I. 35-37. 41-47.

43) Cf. Aphraates, *Demonstratio XXIII* 3, in: PS I/2 (1907) 9-10. Aphrahat. *Demonstrationes, ibid.* Bd. II 529 をも参照。

ているものと思われる。ただしアフラハトは、回心者の教会への和解をも「病者のいやし」のイメージで描くことがあり⁴⁴⁾、「衰弱した者への塗油」の表現は「回心者」のことを指しているのかもしれない。シリアでは回心期を終えた回心者および異端者が、和解のしるしとして塗油される習慣がかつてあったことから、アフラハトがこの和解の儀式を示唆している可能性もある⁴⁵⁾。あるいは、「病者の油」が「求道者の油」をも兼ねた『主の遺訓』の場合と同様に、ここでは「病者の油」と「和解の油」の双方を念頭に置いているのかもしれない。

3.2. スルピチウス・セヴェールス

アクイタニアの修道士スルピチウス・セヴェールス (Sulpicius Severus, †420年頃)は、古代西方教会における病者の塗油の実践の様子を今に伝えてくれる最初の人物である⁴⁶⁾。しかも彼の場合、アフラハトと比べても病者の塗油の描写であることがはっきりしている。

彼は若くして妻に先立たれたのち、トゥール司教マルティヌス(†397年)の感化を受け、アクイタニアで修道生活に入った。修道者の理想像としてのマルティヌスを広く世に伝えようと『聖マルティヌス伝』をまとめるが、これはマルティヌスの生前、おそらく396年にすでに公刊されていた。マルティヌスの死後、スルピチウスは『聖マルティヌス伝』の補遺としてさらに3つの手紙(397~398年)および『対話』(403/404年)を書いている⁴⁷⁾。

病者の塗油の実践の様子は、『マルティヌス伝』に1度、『対話』に2度、

44) Cf. Aphraates, *Demonstratio* VII 2-6, PS I/1 (1894) 315-322; Aphrahat, *Demonstrationes*, *ibid.* Bd. II 216-219.

45) Cf. Aphrahat, *Demonstrationes*, *ibid.* Bd. I 64.

46) Cf. Sulpice Sévère, *Vie de saint Martin*. *Intr., Texte et Trad.* par J. Fontaine. Tom. I. -III. (SC 133-135), Paris 1967-1969. Tom. II. (SC 134), 828; A. Heinz, *Die Krankensalbung im spätantiken Gallien. Das Zeugnis der Martinsschriften des Sulpicius Severus (um 400)*, in: *TThZ* 106 (1997) 271-287. 274.

47) Cf. Heinz, *ibid.* 271-272; K. H. Schwarte, *Art. Sulpicius Severus*, in: *LACL* (注 35), 574-575.

いずれもマルティヌスの徳を強調する奇跡物語の中で描かれる。以下、3つの奇跡物語のテキストを順に示そう。

『マルティヌス伝』では、マルティヌスのトリアー滞在中、ある瀕死の少女に病者の塗油が施される。それによると、トゥール司教のトリアー逗留を知った少女の父親は、マルティヌスがバジリカで他の司教たちと典礼を祝っている最中に駆けつけ、娘を治してくれるように請う。マルティヌスはためらうが、同僚司教たちの強い勧めにより少女の家に向かう。

始めに、そのような場合に通常用いる手段として、彼はまずひざまずき、祈った。それから病者を見つめ油を持ってくるように頼んだ。それを祝別した後、少女の口に力に満ちた聖なる液体を注ぐと (in os puellae uim sancti liquoris infundit)、直ちに声が戻った。油が塗られると、身体の各部が次々に生気を帯びてきた。ついに病者は歩き始め、人々はその証人となった。⁴⁸⁾

一方『対話』は、マルティヌスと修道生活をともにしたことのあるガルスが自ら伝え聞いた話をスルピチウスらに語り聞かせる体裁をとる。病者の塗油に関する2つの奇跡伝を収める(それぞれ『対話』I、『対話』IIと略記)。

『対話』Iでは、ある父親が生まれつき口のきけない12歳の少女を伴ってマルティヌスのもとを訪ねる。場所はシャルトルである。始めはためらうマルティヌスだが、同伴していた司教たちの強い勧めにより、父親の願いに応じ祈りをささげる。マルティヌスはまず他の群集を遠ざける。

[同伴の] 司教たちと少女の父親が立会うなか、[マルティヌスは] 彼の習慣にしたがって地面にうつ伏し、祈りました。それから少量の油

48) Sulpicius Severus, Vita Sancti Martini 16 (CSEL 1, 126, 4-9).

のうえに跋魔の祈りをささげ、祝別しました (dein pusillum olei cum exorcismi praefatione benedicit, [...]). そして少女の舌を指でおさえながらその聖化された液体を彼女の口に注いだのです (adque ita in os puellae sanctificatum liquorem, [...], infudit.). 結果は聖者 [マルティヌス] を欺きませんでした。少女に父親の名を訊ねると、少女はすぐに答えました。父親は喜びのあまり声を上げ、涙のうちにマルティヌスの膝を抱きしめました。一同が驚いたことに、それが父親の聞いた少女の初めての声だということです。⁴⁹⁾

『対話』IIは治癒物語ではなく、病者の油に関する奇跡物語である。場所はトゥールで、司教座聖堂あるいはマルティヌスの修道院と市長官アヴィティアヌスの邸宅が奇跡の舞台である。ガルスはこの話を知人の司祭アルバジウスから聞いたとしている。

アヴィティアヌスの妻は、さまざまな病気の際に必要な油をいつものように祝別してくださるようとマルティヌスに送りました。容器はガラスでできており、腹の部分は丸く口は伸びておりました。油は、その長く伸びた口の先までは入っていませんでした。そのような容器の場合、先端の部分に栓ができるよう余裕を残しておくためです。司祭が見たと証言するところによりますと、油はマルティヌスが祝別すると口から溢れ出てしまうほど増えたそうです。容器が婦人のもとに届けられる間も [祝別の] 力により溢れ続けたといえます。容器を運ぶ少年の手の中にも油は溢れ、彼の服は溢れ出た液体ですっかり濡れてしまいました。婦人は、口の先端までいっぱいになった容器を受け取ったのでした。司祭 [アルバジウス] が今日もなお語り伝えているように、そのガラスの容器には [内容物を] 大切に保管してお

49) Sulpicius Severus, Dialogus III, 2 (CSEL 1, 200, 10-17).

くために通常閉められる栓のための余裕がありませんでした。私の記憶するところによると、そのとき起こった次のことも不思議でした。一とって彼は私を見た。マルティヌスが祝別した油の入ったガラス瓶を、婦人は幾分高い窓台に置きました。ところが瓶がそこにあるとは知らぬ小間使いの少年が、[瓶に] かぶせてあった布を不注意にも引っ張ってしまいました。瓶は大理石に覆われた床の上に落ちてしまいました。居合わせた者は皆、神の祝福まで飛び散ってしまったのではないかという恐れにとらわれました。しかし瓶は、まるで柔かい羽毛の上にも落ちたかのように無傷のまま見つかったのです。この出来事は、偶然というよりマルティヌスの徳の力に帰すべきものです。彼の祝福は褪せることはありません。⁵⁰⁾

スルピチウスが伝えるこれら3つの奇跡物語は、すべて10年以内に書き記されたものであり、その意味でいずれも同時期の病者の秘跡の実践の様子を伝えているとみることができる。A. Heinzによると、これらの奇跡物語はマルティヌスの徳の高さをたたえることに主眼を置いているのであって、病者の塗油の仕方を伝える意図をもって書かれたのではない。それだけに、奇跡物語の描く病者の油の扱いの様子は歴史性においても十分信頼に足るものである⁵¹⁾。

上記3つの物語から、4世紀後半から5世紀初頭にかけてガリア地方で病者の塗油がどのように実践されていたかを読み取ることができる。

まず、油を祝別する権限は司教にあった。その際、司教の徳が高ければ高いほど祝別の力もいや増すと考えられた。「(瓶の) 口から溢れ出てしまうほど」の油は(『対話』II)、司教マルティヌスの人効的行為(*opus operantis*) が彼の事効的行為(*opus operatus*) の効果を高めたということを描写するものと考えられる⁵²⁾。

50) Ibid. Dialogus III, 3 (CSEL 1, 200, 21-201, 17).

51) Cf. Heinz, Krankensalbung, op. cit. (注46), 278-279.

塗油は次のような要領で行われたのであろう。塗油を授ける者はまず、平伏あるいは跪拜の姿勢をとって祈りをささげる。塗油の儀式全体はこのように祈りをもって始められる。塗油者が司教である場合、次いで油が祝別される。祝別の祈りの文言は不明だが、『対話』Iの記述は、それが「油の跋魔」と「油の祝別」という2つの構成要素から成っていたことをうかがわせる。「跋魔」が「祝別」に先行するという祈願文構造は古ガリア典礼の特徴を示すもので、『ポッピオ・ミサ典礼書』（おそらく7世紀頃）で始めて文言化される。この祈願文構造がすでにスルピチウスの著作のうちに示唆されていることは興味深い。平伏または跪拜による祈りの後、あるいは続く油の祝別の後に、塗油が施されたものと思われる⁵³⁾。

スルピチウスの著作は、塗油の仕方についても貴重な示唆を与える。マルティヌスは、祝別した油を患部に直接塗油したほか病者の口にも注いでいる。『マルティヌス伝』の瀕死の少女は、非常に弱っており「息も絶え絶えで *tenui spiritu palpitabat*」「霊だけで生きておりからだはすでに死んでいた *solo spiritu uiuit, iam carne praemortua*」。しかしマルティヌスが少女の口に油を注ぐと「直ちに声が戻った *statimque uox reddita est*」。A. Heinzによれば、スルピチウスは塗油者が病者の患部に直接油を塗ることを重視する。マルティヌスはからだの各部にも順次塗油を施すが、その前にまず少女の口に油を注ぐ。これは「気道への塗油」である。気道は塗油者の手に届かぬ部位であるが、口に油を注ぐことによりマルティヌスはいわば少女の気道に塗油を施したのである。それは「気道を回復させることによって瀕死の状態にある [少女の] からだ [全体] が再び生気を吹き返す」ためであった。気道に塗油を受けた少女は息を吹き返し、これによってはじめてからだの他の部位の治癒も可能になったのである。『対話』Iの少女の場合にも同様のことがいえる。この「口のきけない少女」も口に油を受ける。いわば「のどに塗油」されたことによって発声器官が回復し、

52) Cf. *ibid.* 280-281.

53) Cf. *ibid.* 281-283.

父親の名を声に出して呼ぶことができたのである。これらのことから、当時の病者の塗油は具体的な病気の部位の治癒に主眼が置かれていたということが分かる。塗油者は、祝別された「聖なる油の力」によって病者が身体的にいやされるようにと祈り、塗油を施したのである⁵⁴⁾。

病者の油には、前もって司教により祝別された油が用いられることもあった。そのような場合、塗油は信徒に任せられていた。これは病者の油が信徒の家に保存されていたことから分かる。『対話』IIに出る油は、そのような病気の際の「備え」としての油だった。油は通常、ガラス製の小瓶に入れられた。保管のために特に定められた場所はなかったが、祝別された油にふさわしく十分な注意が払われたようである。『対話』IIは「幾分高い窓台」を保管場所を選んでいいる。瓶を覆っていた「布」も、祝別された油への畏敬の念の表れとみることができる⁵⁵⁾。

3.3. 教皇イノチェンティウス1世

スルピチウスの著作からうかがい知ることのできる病者の塗油の実践の様子は、ほぼ同時期の教皇イノチェンティウス1世（在位402-417年）の書簡によっても確認することができる。首位権の確立に意を注いだ教皇イノチェンティウスは、ローマの典礼慣習を典礼法規として教える書簡もいくつか残している。それだけに、他の地域教会の典礼習慣との符合は意義を持つ。それらの中に病者の塗油に関する書簡も見出される。ウンブリア、グッピオの司教デチェンティウス宛ての書簡（416年3月19日付）がそれである。この書簡の中でイノチェンティウスはグッピオ司教のもとで働く助祭チェレスティヌスからの「病者の塗油」に関する質問に答えている。

まず、ヤコブ5:14-15を引用したうえでこの聖書箇所を以下のように註解する。

54) Cf. *ibid.* 283-284.

55) Cf. *ibid.* 279-280.

[ヤコブ5:14-15の引用] この箇所を、聖なる香油によって (sancto oleo chrismatis) 塗油されることのできる、病気の信徒のことと理解し受け入れなければならないことは疑いをはさまない。司教によってつくられるこの油は、司祭のみならずすべてのキリスト者が、自身の、あるいは近親者の緊急の場合、塗油のために用いることがゆるされる。⁵⁶⁾

ここで、前述のスルピチウスが描いた当時の塗油の習慣、すなわち信徒も自宅に病者の油を備え必要に応じて用いることができたというガリアの習慣が、イノチェンティウスの見解と図らずも合致していたことが分かる。通常の塗油者はしかし司祭だったようである。それは、司教にははたして塗油する資格はないのだろうか和一介の助祭チェレスティヌスに疑念を抱かせるほどあたりまえのことであった。聖書の権威、すなわちヤコブ5:14が「presbyteri」—当時の理解によれば「司祭」—にしか言及していないことも彼の疑念を一層強めたようである。これについて教皇は、司祭にゆるされていることは当然司教にもゆるされていると述べ、ヤコブ5:14が「presbyteri」と記す理由を次のように述べる。

なぜなら司祭に [塗油がゆるされている] といわれたのは、他の所用でふさがっている司教にはすべての病者のもとに行くことはできないからである。もし司教が訪問することができ、[司教が]自身の訪問を受けるにふさわしいと思う人なら、聖香油 (chrisma) をつくることを任務とする司教は何らためらうことなく、聖香油を祝別しそれを [その病者に] 塗油することができる。⁵⁷⁾

最後に教皇イノチェンティウス1世は、回心者には塗油は授けられない

56) DH 216.

57) Ibid.

という見解を示す。その理由は、病者の塗油は秘跡であるからという。

これは [=聖香油は] 回心者には注がれることができない。なぜなら [これは] 秘跡に属するからである (Nam paenitentibus istud infundit non potest, quia genus est sacramenti.)。他の残りの秘跡を拒否された者に、どうしてこの類いのみ許されることができようか。⁵⁸⁾

イノチェンティウスが病者の塗油を秘跡とみなしている点は、同教皇が同じく「秘跡」に数える聖体に関する当時の習慣と比較するとき、一層興味深い。O. Nußbaum の研究が明らかにしたように、古代教会においては、瀕死の病者のために保存された聖体、いわゆる「最後のかて viaticum」を運ぶ奉仕が、緊急の場合信徒にもゆるされていた⁵⁹⁾。祝別された病者の油も、同じように、これを必要とする信徒が各々家に持ち帰ることがゆるされたのであろう。「秘跡」は緊急の場合、必ずしも叙階を受けた奉仕者の手から受ける必要はなかった。自宅に保存された病者の油にも、聖体と同様秘跡の力は持続し、この秘跡を執行することを通して主が病者に臨在し助けると信じたものと思われる⁶⁰⁾。

3.4. アルルのチェザリウス

同様に、アルルの司教チェザリウス (†542) も信徒による病者の塗油を認めている。

チェザリウスの説教からは、当時いかに魔術を用いる治療師が活躍していたかが分かる⁶¹⁾。魔術使いの治療師への批判を込めてアルル司教は「教会の薬 medicina ecclesiae」⁶²⁾ の効能を説いてやまなかった。

58) Ibid.

59) Cf. O. Nußbaum, Die Aufbewahrung der Eucharistie (Theoph. 29), Bonn 1979, 75-76; Heinz, Krankensalbung, op. cit. (注 46), 287.

60) Cf. Heinz, Krankensalbung, ibid.

61) Cf. Caesarius Arles, Sermo LII 5 (CChr.SL 103, 232).

病気が襲いかかる度に、病者はキリストの御からだと御血を受けるように。司祭によって祝別された油を (*oleum benedictum a presbyteris*) 謙遜にまた信頼をもって願ひ、患部に塗油するように。それは、次のように聖書に書かれてあることが病者のうちにあつて成就するためです。[ヤコブ 5:14-15 の引用]見よ、兄弟たち。病気のとき教会に馳せる者は、からだの健康と罪のゆるしを受けるにふさわしいのですから。⁶³⁾

チェザリウスのいう病者は、臨終の床にある者ではなく軽症患者、病気にかかる度に教会に馳せ、聖体と病者の油を受けることのできる者である⁶⁴⁾。

病者の油が司祭によって祝別されると述べる点も興味深い。小教区の聖堂あるいはオラトリウムに、そのような場合のための聖体と病者の油を保存しておく習慣が当時かなり広まっていたものと推察される⁶⁵⁾。

チェザリウスによれば、聖体を受け祝別された油を患部に塗る者には「からだの治癒 *sanitas corporis*」のほか「魂の治癒 *sanitas animae*」すなわち「罪のゆるし *indulgentia peccatorum/remissio peccatorum*」が与えられる⁶⁶⁾。しかし異教の治癒師のもとに馳せる者は「からだの治癒」を求めて「魂の死 *mors animae*」を得ることになるという⁶⁷⁾。ここで言われる「罪」がどのようなものかチェザリウスは語らないが、教会の和解を必要とするほどの罪ではなかったろう。病者には「キリストの御からだと御血」を受けることも勧められているからである⁶⁸⁾。

62) Cf. *ibid.*

63) *Caesarius Arles, Sermo XIII 3 (CChr.SL 103, 66).*

64) Cf. *Id., Sermo L 1 (CChr.SL 103, 225); Id., Sermo CLXXXIV 5 (CChr.SL 104, 751).*

65) Cf. *Nußbaum, Aufbewahrung, op. cit. (注 59), 96-97, 222.*

66) Cf. *Caesarius Arles, Sermo L 1 (CChr.SL 103, 225); Id., Sermo CLXXXIV 5 (CChr.SL 104, 751).*

3.5. ベーダ・ヴェネラーピリス

イングランドの神学者ベーダ・ヴェネラーピリス（†735）は、現存する最古の『ヤコブの手紙注解』の著者としても知られる^{69）}。ヤコブ 5:14-15 の記述に始まった古代教会における病者の塗油の実践の概観の最後に、ベーダがこの箇所をどのように注解しているかを見よう。

ベーダにとって「からだあるいは信仰を病む者」が「長老たちを招き祈ってもらう」（ヤコブ 5:14）のは、病者が若年者ではなく年長者の助けを求めためである。若年者たちはかえって害となる忠告を与えかねない^{70）}。

続けてベーダはヤコブ 5:14 以下を次のように注解する。

「[長老たちは] 彼のために祈るように」と [使徒ヤコブは] いる。「主の名によって彼にオリーブ油を塗るように。信仰に基づく祈り

67) Cf. Id., Sermo LII 5 (CChr.SL 103, 232). これに関しては、同時期の病者の塗油についてのアルメニア教会からの証言も興味深い。5世紀後半のアルメニアの主教ヨハネス・マンダクニ（在位 478-490 年）のものとしてされる 25 からなる教話集がそれである。著者はその最後の第 25 教話で病者の塗油に言及する。魔術を使う異教の治療師を非難する文脈でヤコブ 5:14 以下を引用し次のように述べる（J. Blatz による独訳）。“[Die falschen Propheten haben] die Gnade Gottes, das Gebet und das Öl der Salbung verloren, welche die Gebote für den Kranken vorgeschrieben haben, auch das Fasten und Gebet für den Kranken vernachlässigt, während sie zur Zauberei und Zauberschriften abirren...”. “...Was befiehlt uns denn Gott in den Geboten? Befiehlt er uns nicht in der Tat für all unser Tun das Kreuz als Schutzmittel und Wegweiser, für die Kranken das Gebet und die Salbung mit Öl, für die vom Teufel Belästigten Fasten und Gebet?” (Reden des armenischen Kirchenvaters Johannes Mandakuni aus dem Armenischen übers. v. J. Blatz [u. a.], in: ²BKV 58 [1927], 251. 253) ヨハネス・マンダクニは病者の塗油のほか、病者自身の祈り、また「病者のためにささげられる断食と祈り」の重要性をも強調する。異教の治療師の護符に対抗すべく、キリスト者の「お守り」でありすべての行いの「道しるべ」である「十字架」に目を向けるよう促している。

68) Cf. Kaczynski, Krankensalbung, op. cit. (注 3) 270.

69) Cf. Beda Venerabilis. In epistulam Iacobi expositio. Kommentar zum Jakobusbrief übers. u. eingel. v. M. Karsten (FC 40), Freiburg-Basel-Wien [u. a.] 2000, 58-60.

70) Cf. Beda Venerabilis, In epistulam Iacobi expositio V 14-15 (CChr.SL 121, 221, 157-165).

は、病者を救うだろう」と。使徒たちもこれらのことを行なったと福音書にある。教会の慣習もこれを守っており、病者は祝別された油を司祭から塗油され、[塗油に] 伴う祈りによっていやされるのである。しかし教皇イノチェンティウスも書いているように、司祭だけではなくすべての信徒が自分自身のためあるいは近親者のために病者の油を用いることができる。ただし [塗油のための] 油をつくることは司教のほかゆるされない (quod tamen oleum non nisi ab episcopis licet confici)。[使徒ヤコブが] 「主の名によって油を」といっているからである。これは主の名によって祝別された油のことを指している。あるいは [司祭や信徒が] 病者に塗油するときには、彼らが主の名を呼び求めるべきことを意味している。⁷¹⁾

ペーダは『ヤコブの手紙』を抛り所にしつつ当時の病者の塗油の原則に言及している。それによれば「主の名によって」油を祝別する権限は司教にのみあった。他方、塗油を執行する、あるいは塗油に立ち会う「長老たち」(ヤコブ 5:14) は必ずしも司祭でなくともよかった。ペーダはこの点を教皇イノチェンティウスの見解(前出)に基づいて主張している。複数の司祭を招くのが困難な小教区は当時から多々あったと思われ、そのような場合、実際には年配の信徒らが「長老たち」の核をなしていたものと推察される⁷²⁾。

「長老たち」は塗油のためだけに参集するのではなかった。塗油には祈りが伴った。病者の油にいやしの力があると信じられたことは疑いを入れないが、ペーダはヤコブに倣い「信仰に基づく祈りによって」すなわち「[塗油に] 伴う祈りによっていやされる oratione comitante sanentur」ことをも強調する。具体的には塗油の際「主の名を呼び求めること nomen domini super eum inuocare」をあげている。主の名を呼び求め、呼び求められる

71) Ibid. (CChr.SL 121, 221, 165-175).

72) Cf. Kaczynski, Krankensalbung, op. cit. (注3) 271.

方自身の臨在を信じつつ塗油を行うことが重要であるとベータは考えている⁷³⁾。

ベータは引き続きヤコブ 5:15 を以下のように注解する。

「その人が罪を犯したのであれば、赦されます。」(ヤコブ 5:15) 多くの者が、魂において犯した罪のため、からだの病あるいは死をこうむる。そこで使徒 [パウロ] もコリント人に、彼らがいつまでもふさわしくないままに主のからだを受けているので「そのため、あなたがたの間に弱者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだのです」(1 コリ 11:30) というのである。したがって罪の状態にある病者が、教会の司祭に [罪を] 告白し、[罪から] 離れ、自らを正すよう完全な心で取り組むならば、彼らはゆるされるだろう。なぜなら、罪は自らを正す決心の告白によらずしては決してゆるされうるものではないからである。⁷⁴⁾

ベータはここで、罪が病気をひき起こす原因となりうる、とみている。罪と病気とを関連づける一方、罪のゆるしの条件としてベータは病者の塗油ではなく「自らを正す決心を [司祭に] 告白すること *confessio emendationis*」をあげる。彼の生きた時代は、罪の償いを記した表に基づいて行う個別告白(いわゆる *pénitence tarifée*)が浸透し始めた時期にもあたる。ベータの見解はこうした当時の時代思潮を反映しているのかもしれない⁷⁵⁾。

4. まとめ

以上、古代教会における病者の塗油の実践の様子を、油の祝別の祈りお

73) Cf. *ibid.*

74) Beda Venerabilis, *In epistulam Iacobi expositio* V 14-15 (CChr.SL 121, 221, 175-222, 183).

75) Cf. Kaczynski, *Krankensalbung*, *op. cit.* (注 3) 163-164. 271-272.

よび教父の伝統を手がかりに駆け足で追った。最後にこの通覧によりどのような全体像が浮かび上がってくるのか、その素描を試みまとめたい。

古代教会は、病者とともに祈り病者に塗油する習慣をユダヤ教から受け継いだ。キリスト教の病者の塗油をユダヤ教のそれと分かち特徴は、キリスト者が「主の名によって」病者のために祈り、塗油するという点にあった⁷⁶⁾。それは、塗油のしるしを通して主イエスご自身が今なお彼のいやしのわざを継続して行なっておられる、との信仰に基づいていた。

この古代教会の基本姿勢は、病者の油の祝別の祈りが油のうえに「主の名」を呼び求めることにも表れている⁷⁷⁾。祝別の祈りは、かつて「王、祭司、預言者、殉教者たち」に聖香油が塗油され、彼らを強めたことを想起し（アナムネーシス）、それと同じ効果を病者の油にも期待する⁷⁸⁾。その際、呼び求められる方、主イエスの病者に寄せる慈愛の姿勢が引き合いに出された。「あなたこそあらゆる病、あらゆる苦しみをお癒しになる方」⁷⁹⁾「わたしたちの病と弱さを身に負われた方」⁸⁰⁾などの言葉は、イエスに全き信頼を寄せるキリスト者の信仰告白となっている。イエスを想い起こす文言がときに信仰宣言の響きを帯びるのも⁸¹⁾、ひとつには、復活にいたるイエスの道行きに病者の道行きを重ね合わせつつ、復活の永遠のいのちに希望をおく、キリスト者の信仰のあらわれとみることができよう。

病者の油の祝別の祈りが呼び求めるのは「主の名」のみではなかった。エピクレーシスでは、「神」が⁸²⁾油のうえに「(キリストの)いつくしみ深いあわれみ」⁸³⁾、「いやしの力」⁸⁴⁾「聖なる力」「いつくしみとあわれみ」⁸⁵⁾ひ

76) ヤコブの手紙、ベエダ。

77) 『エウコロギオン』I・II, ベエダ。『主の遺訓』をも参照。

78) 『使徒伝承』、『古ゲラジウス』、『グレゴリアヌス・ハドリヤヌス』。『大祈禱書』、アフラハトをも参照。

79) 『主の遺訓』。

80) 『エウコロギオン』II。

81) 『エウコロギオン』I・II。

82) 『主の遺訓』では「キリスト」。

83) 『主の遺訓』。

いては「聖霊」⁸⁶⁾を送るようと呼び求められた。

油の祝別の祈りおよび祝別に伴う典礼注記、さらに教父たちの著作などから、古代教会がどのように病者の塗油を実践していたか、その輪郭が浮かび上がってくる。

典礼の場で油が祝別される場合、油は所属小教区の信徒がそれぞれ持ち寄った⁸⁷⁾。祝別の祈りは、ミサ奉献文、とりわけ聖木曜日のミサ奉献文に加えられた⁸⁸⁾。祝別された油はめいめい家に持ち帰り、内服したり⁸⁹⁾、自身に塗ったり⁹⁰⁾、あるいは人に塗ってもらったりした⁹¹⁾。このことから分かるように、病者の塗油の執行は司教⁹²⁾、司祭⁹³⁾のほか病気の信徒ならびにその近縁者にもゆるされていた⁹⁴⁾。他方、病者の油を祝別する権限は司教⁹⁵⁾、司教と共同司式をする司祭団⁹⁶⁾、および司祭⁹⁷⁾にあった。

祝別された油には、罪をゆるす効果があると信じられた⁹⁸⁾。跋魔の力をも

84) 『エウコロギオン』 I・II。

85) 『大祈禱書』、ただし婚姻の油の祝別の祈りにおいて。

86) 『古ゲラジウス』、『グレゴリウス・ハドリアヌス』。

87) 『使徒伝承』、『グレゴリウス・ハドリアヌス』。『主の遺訓』も参照。

88) 『使徒伝承』、『主の遺訓』、『エウコロギオン』 I、『古ゲラジウス』、『グレゴリウス・ハドリアヌス』。

89) 『使徒伝承』、『エウコロギオン』 I、『古ゲラジウス』。『マルティヌス伝』、『対話』 Iをも参照。

90) 『古ゲラジウス』、『グレゴリウス・ハドリアヌス』、チェザリウス。『使徒伝承』、『エウコロギオン』 Iをも参照。

91) ヤコブの手紙、アフラハト、『マルティヌス伝』、『対話』 I、イノチェンティウス 1世、ベーダ。『エウコロギオン』 I・II、『大祈禱書』、マンダクニをも参照。

92) 『マルティヌス伝』、『対話』 I、イノチェンティウス 1世。

93) イノチェンティウス 1世、ベーダ。

94) 『古ゲラジウス』、『グレゴリウス・ハドリアヌス』、『対話』 II、イノチェンティウス 1世、チェザリウス、ベーダ。『使徒伝承』、『エウコロギオン』 IIも参照。

95) 『マルティヌス伝』、『対話』 I・II、イノチェンティウス 1世、ベーダ。

96) 『グレゴリウス・ハドリアヌス』。

97) 『主の遺訓』、チェザリウス。

98) ヤコブの手紙、『エウコロギオン』 II、チェザリウス、ベーダ。『主の遺訓』では「求道者の罪」がゆるされるとされ、アフラハトは祝別された油に「回心者」の和解のしるしを見る。

備えるとみなされた⁹⁹⁾。病者の油を異教の治癒師への対抗手段とみなした時代にはとくにそうであった¹⁰⁰⁾。他方、罪が病気の一因となりうると考えられたのは比較的後代に入ってからのことである¹⁰¹⁾。病者の塗油は、あくまでもからだところの健康の回復にその主眼が置かれていた。その際、「信仰に基づく祈り」が病者のためにささげられることが求められた¹⁰²⁾。

さて最後に、こうした古代教会の実践から、現代の教会に生きるわたしたちは、何を学ぶことができるだろうか。ここでは1つの側面にのみ言及し稿を結びたい。

人は病気のとき、家族、親戚、友人の支えを特に必要とする。それは現代でも同じことである。最新の医療・看護・介護技術を楽しむことのできる国々においても、病者が親しい者の支えを必要とすることにはいささかも変わりはない。加えて信仰者にとっては、所属する小教区の祈り、あるいはより広い意味でのキリスト信仰共同体からの祈りも大きな支えとなる。人と人とのつながりが希薄になりがちな現代社会においてはなおのこと、主の臨在を確信し病者とともに助けを祈り求める信仰共同体の存在はその意義を増してきている。したがって、今後は病者の塗油にも、そのような「信仰共同体の祈りのしるし」たることが一層求められよう。冒頭でも紹介したように、病者の塗油には本来「共同体的性格」が備わっている¹⁰³⁾。その意味では、病気の回復を素朴に、かつ力強く祈り求める古代の「油の祝別の祈り」や、その油の祝別をミサ典礼という信徒の集会の中で執り行なう習慣、病者とともに病者のためにささげる祈り、また近親の信徒が病者に塗油をほどこすなどの古代教会の実践は、現代にあってもなお示唆に富むであろう。

99) 『エウコロギオン』 I および II。

100) チェザリウス、マンダクニ。

101) ベーダ。ルカ 1:1-5; ヨハ 9:2-3 は、病気や災難が罪の結果であるとの考えをはっきりと退けている。

102) ヤコブの手紙、『マルティヌス伝』、『対話』 I, マンダクニ, ベーダ。

103) Cf. Ordo unctionis infirmorum (注 1), 20: [...] *Haec enim sacramenta, sicut et cetera, indolem communitariam prae se ferunt, [...]*.

Die Krankensalbung in der Alten Kirche

Jun NISHIWAKI

Die vorliegende Arbeit untersucht die Praxis der Krankensalbung in der Alten Kirche. Zunächst wird ihre biblische Wurzel, die öfter von den Kirchenvätern zur Begründung ihrer Praxis zitiert wird, ins Auge gefasst (Jak 5, 14f.). Danach werden Ölweihegebete behandelt, die aus einigen Liturgiebereichen stammen. Den Gebeten folgen die Zeugnisse der kirchlichen Schriftsteller. Sie bringen uns die kirchengemeindliche Praxis in der Alten Kirche näher.

Unsere Untersuchung ergibt das folgende Bild:

Die Krankensalbung der Kirche hat in der jüdischen Gebets- sowie Ölsalbungstradition ihre Wurzel. Ihr christliches Charakteristikum liegt darin, dass man "im Namen des Herrn" über Kranke betet und sie salbt (vgl. Jak 5, 14f.). Die christliche Praxis der Krankensalbung beruht auf dem Bewusstsein, dass es zum Sendungsauftrag Jesu gehört und die Fortsetzung seiner Heilstaten ist, den Kranken beizustehen und sie zu salben. Man setzt damit die Heilshoffnung ganz auf Jesus und verdankt ausschließlich ihm die Heilkraft der Ölsalbung.

Dies kommt deutlich zum Ausdruck, wenn im Ölweihegebet der "Name des Herrn" genannt oder angerufen wird. Manche Ölweihegebete enthalten weiterhin eine Epiklese, in der man darum bittet, dass Gott (oder Jesus) über das Öl den Heiligen Geist bzw. die "heilende Kraft" sowie die "heilige Macht" "Barmherzigkeit und Mitleid" senden

möge. Dabei wird auch das in der Bibel geschilderte Verhältnis Jesu zu den Kranken herangeführt.

Die Zeugnisse der Kirchenväter sowie Rubriken in den Ölweihebeten bringen uns der altchristlichen Gemeindepraxis besonders nahe. Öl wurde von den Gläubigen der Gemeinde mitgebracht und nach der Weihe - sie wird öfters an das Hochgebet der Messfeier, besonders des Gründonnerstags, angeschlossen - wieder heimgetragen. Dort trank man es, man salbte sich damit oder ließ sich salben. Als Spender der Krankensalbung galten außer dem Priester und dem Bischof auch allen Gläubigen - einschließlich der Verwandten des Gesalbten und des Kranken selbst. Die Ölweihe war dagegen den Bischöfen mit Presbyterium oder Priestern vorbehalten. Das geweihte Öl hatte auch die Wirkung des Sündennachlasses und des Exorzismus, zumal man es gerne als Antithese zu heidnischen und abergläubigen Heilmitteln darbringen wollte. Doch allgemein gesehen, betet man eher um körperliche und gleichzeitig seelische Genesung. Dabei spielte die entscheidende Rolle das "gläubige Beten" (vgl. Jak 5, 15) bei der Salbung.